

なり、あらぐに非ず、次なるは、あらくともありぬべけれど、なほ咲一字なれば、わらふなり、さ  
てこ、は宇受賣命の謀て申す詞にて、己が俳優と、諸神の咲とを合せて、眞實におもしろく、樂  
歡喜二字を加へたいひなせるなり、故

〔江談抄二雜事〕範圍恐懼事

又範圍爲五位藏人、有奉行事、小野宮右府實資原爲上卿、被候陣下申文之時、弭君顯定於南殿東妻  
被出于陰根、範圍不堪、遽以笑、右府不彼知、案内、以咎及奏達、範圍依此事恐懼、

〔枕草子六〕まさひろはいみじく人にわらはる、物哉、おやなどいかにきくらん、○申ちもくの中  
の夜、さしあぶらするに、とうだいのうちしきをふみてたてるに、あたらしきゆたんなれば、つよ  
うとらへられにけり、さしあゆみてかへれば、やがてとうだいはたふれぬ、したふづはうちしき  
につきてゆくに、まことに道こそしんどうしたりしか、頭つき給はぬほどは、殿上の大ばんに人  
もつかず、それにまさひろは、まめひともりをとりにて、こさうじのうしろにて、やをらくひければ、  
びぎあらはして、わらはる、事をかぎりなきや、

〔宇治拾遺物語十四〕これもいまはひかし、○申あるときわかき女房どものあつまりて、庚申しけ

る夜、この入道の君、かたすみにはうけたるていにて、あたりけるを、夜ふけるま、に、ねぶたが  
りて、中にわかくほこりたる女ばうのいひけるやう、入道の君こそかゝる人はおかしきものが  
たりなどするぞかし、人々わらひぬべからんものがたりし給へ、わらひてめをさまさんといひ  
ければ、入道をのれは口てづ、にて、人のわらひ給中、ものがたりは、えし侍らじ、さはありとも  
わらはんとだにあらば、わらははかしたてまつりてんといひければ、物がたりはせじ、たゝわらは  
かさんとあるは、さるがくをし給ふか、それは物がたりよりはまさることにてこそあらめとま  
だしきにわらひければ、さも侍らすたゝわらははかしたてまつらんとおもふなりといひければ、  
こはなに事ぞ、とくわらははかし給へ、いづらくとせめられて、なににかあらん物もちて、火のあ